

小早川修さんのファンである友人に誘われて第11回修能会に行ってきました。午前の部には尺八、篠笛の各演奏と、尺八、篠笛と一緒に小早川修さんが独唱する「草の祈り」という意欲的なプログラムがありました。午後は小早川さん一家の出演で、次男の康充君の仕舞「箆」から始まりました。康充君は名子方として2百番以上(3百番?)の能に出演、瞠目していましたが最近子方は卒業した年頃です。この日は大人と同じ舞い方で、いよいよ本格的な能の修行に入っていることが分かりました。見所に響き渡る良い声でこれからどんな成長をするのだろうか、とても期待を覚えました。次は長男の泰輝さんの能「高砂」でした。昨年私も颯々会で舞囃子「高砂八段之舞」を舞わせて頂き、その難しさに閉口しましたので、わが身のごとく熱心に見ました。この曲は勢いが必要なので若い人も演じますが、やっぱり緩急の付け方の難しさは半端じゃないと改めて思いました。しかし熱演でさわやかな印象を受けました。

能の間に山本東次郎さんの狂言「栗焼」があり、これは掛け値なしで笑えて面白く、常日頃の私の独断ながら東次郎さんは当代一の狂言師だとまたまた思いました。

最後がメインの小早川修さんの能「求塚」。実は私は前に何度か修さんの能を見た事はありませんが、人柄の良さに友人がファンになったほどの熱もなく、むしろ背が高く線が細いのが気になった位でした。ところが今回の「求塚」は私の先入観を払拭するほど深みがあって素晴らしく、「求塚」という曲そのものに対する私の感じまで変えるものでした。またツレの浅見慈一さん、馬野正基さんの連吟が見事で、前場の華やかでのどかな雰囲気醸し出します。それだけ後場の悲惨さ残酷さが胸に迫り、それを実に格調高く演じられました。一言で早く言うと、プロに向かって失礼かもしれないけれど大変なご精進の賜物と感じました。年齢的にもこれからもっと活躍される方なので、とても楽しみです。

この小文を書いているのは2011年大晦日。私の能鑑賞について、この一年を振り返ってみました。観た能は全部で48番。29日間能楽堂に足を運びました。約一ヶ月、毎日行ったこととなります。曲目はかなりバラエティに富んでいて同じ曲を見たのは5曲だけ。観た曲を挙げると次のようです。

翁。鶴亀。羽衣(2)。小袖曾我。山姥。安宅。雲雀山。鶴。田村。西行桜。国栖。葛城(2)。殺生石。菊慈童(2)。乱。熊野(2)。高野物狂。絵馬。蟬丸。阿漕。小鍛冶。杜若。天鼓(2)。鸚鵡小町。烏帽子折。錦木。通小町。玄象。船弁慶。井筒。屋島。采女。石橋。花月。葵上。道成寺。松虫。頼政。俊寛。熊坂。道明寺。高砂。求塚。

今年の私の観能の特徴は上記の曲のうち、シテが観世清和師が15番とダントツです。これでもう私は立派なファンだと思うのですが、とにかく最近はずっと素晴らしく、観に行っても期待をはずされたことはありません。他にも多く出演されていますが一年の演能数が多いので、とても全ての追っかけをするのは不可能です。今年印象に残ったのは安宅や道成寺など、やはり大舞台では一段と輝きが増します。

しかし全体を振り返ってみると私自身、詳細を思い出せない曲も多々。本で読むところによると白洲正子さんと多田富雄さんの二人の能談議ではお互いに能面、装束から所作、謡い振りなど詳細に語り合えたとか。たくさん見ても私の能鑑賞には無駄が多いので来年はもう少しメモを残そうと思います。

今年の収穫はアイ狂言の必要性です。今まではアイ狂言の時間になると、能の筋のおさらいみたいだと思って一休みし、あまり内容を聞いていないことが多かったのです(屋島は全く別ですが)。ところが「松虫」を観ていたらアイ狂言の中に、能では表現されない背景がつぶさに語られ、能の理解を深めることが出来ました。今回観た「求塚」でも、アイ狂言で、二人の男から求愛され困ったシテは親に相談し、親が一羽の鴛を二人が打ち競う案を出したのだと説明します。これによって娘(シテ)の気持ちや性格が良く分かり能の理解にも役立ちました。最近よく耳にする事件でストーカーにあう若い女性が親や警察に相談しても、結局良い案がないままに悲劇が起きると類似しています。「求塚」を現代に引きつけて、こんな視点で鑑賞するのも一興かと思いました。尾崎純子・記